

第五章
無賃乗車

「ウイルスの感染が広がっているのに政府はゴーツー・トラベル・キャンペーンを中止しないなあ」

「格安で旅行できるから時間と金に余裕がある人にはたまらんのじゃ」

山本が引き継ぐ。

「でもコロナの影響で失業した人たちにとっては何の恩恵もないわ。医療従事者も仕事をほったらかして旅行するわけにいかないし……」

田中が政府批判を追加する。

「政府はこのキャンペーンがコロナウイルス感染拡大の原因だというエビデンスはなく経済的効果が高いと言って中止するつもりはないらしい」

「何じゃ？ 『エビデンス』というのは？」

『証拠』という英語です」

「なんで英語を使うんじや。ゴーツーにしてもトラベルにしても、キャンペーン、イート……政府は日本語を知らんのか！ 愛国心、愛国心というのなら日本語を大切にしろ！」

「なるほど。それはさておいて感染が広がったのは、ウイルスがゴーツー・トラベルが好きだからなんです」

「どういうことじゃ？」

「昔は交通手段が発達していなかった……いえ、なかったから、感染も非常にスロー……えっ

と日本語で言うとうつくり……」

「バカにするな。それぐらいの英語は分かる！」

「えーっと……でも衛生状態が悪かったし薬もなかったから、ウイルスは確実に蔓延……」

大家が恐縮して言葉を失いかける田中を押しつける。

「分かった。ウイルスはゴーツー・トラベルが始まるとキャンペーンに便乗したというのじゃない」

山本が田中に代わって応じる。

「そうです。エビデンス……じゃなくて証拠の有無など関係ありません。なぜなら彼らは無賃乗車が得意なのです。余りにも小さすぎて乗車券を確認できません。ただ乗りしても証拠をつかめないの」

「目に見えないから用心しろというのが本筋じゃが、目に見えないのならどうしようもないじゃないか」

「鉄道警察官がいくら優秀でも無賃乗車しているウイルスを発見するのはまず無理だわ」

「どれぐらい感染が拡大したらキャンペーンを中止するとかいう対応策なしになぜゴーツー・トラベルにゴーを出したのじゃ。途中で感染拡大地域をキャンペーン対象から外さざるを得なくなるときキャンセル料をどうするのかも決めていなかったから惰性でキャンペーンを継続したのじゃろ。もし火事になったらどうするのかという対策をあらかじめ決めずに『どんどん

第五章 無賃乗車

ワラの家を造りましょう』と言うようなやり方は政治のプロのやり方じゃない」

「大家さん。今や政府……閣僚や官僚はプロじゃないですよ」

「なるほど。そうじゃった。バカなことをいってしまった」

山本が大家に追い打ちをかける。

「政府はステイホームしている人よりゴーツー・トラベルで旅行した人の方が新型コロナウイルスの感染率は低いとまで言っているのですよ」

「何じゃと！」

大家の頭から湯気が出てくると同時にあるデータがテレビ画面に示される。

「これは私が保健所で取材したものです。かなり妨害を受けましたが何とか手に入れました。

保健所は忙しいからゴーツー・トラベルで感染したかどうかまで確認できません。だから結果としてゴーツー・トラベルで旅行した人の感染率が低くなります。これを逆手にとってキャンペーンを中止しないのです。証拠がないというより確認しないのです」

「ウイルスの無賃乗車を防ぐために人の移動を制限するというのは理にかなっておるぞ。ゴーツー・トラベルは即刻中止すべきじゃ」

「そうです。少なくとも積極的に推奨すべき状況ではないでしょう。観光業者は大変でしょうが、問題は税金を投じてまで移動を推進すべきかどうかです。今検証中ですが、旅費や宿泊料を安くするために税金を使うより、関係業界に補助金を支給した方が感染拡大防止に有効かも

知れません。でも検証はしません。企業に『テレワークを』と半ば強制しているのに一般人にはテレ観光ではなく実際に旅行に行けというのはいかなるものでしょうか」

「ゴーツー・トラベルには旅行代金の三十五パーセントも補助するのにテレワークのための機材を買うのに購入割引券は出さない。それに医療関係者にボーナスを出すわけじゃない。なにかおかしいなあ」

「観光業者が苦しんでいるの分かるが、遊びに行く人に税金で補助しておいて、仕事をする人、特に医療従事者に『頑張り手当』を出さないのは片手落ちどころか、やる気をなくするやり方じゃ」

「なるほど、なるほど」

急に大家が興奮する。

「安くなるから旅行に行くこのゴーツー・トラベルのキャンペーンは、高価な返礼品をもらえるふるさと寄付金制度と同じじゃ！」

即座に山本が強く手を打つ。

「大家さん！ 鋭い！」

「何がじゃ？」

「ゴーツー・トラベル・キャンペーンもふるさと寄付金制度も同じ政治家が立案したの。だから似ているんだわ」

山本が大家に微笑みかける。

「誰じゃ？」

「総理大臣です」

すぐさま田中が叫ぶ。

「まさか！ 愚策じゃないか！ 誰も止めなかったのか」

「いたわ。でもその人は左遷されてしまった。だから誰も反対しなくなったの」

「そんな……」

「ふるさと寄付金制度は善意をもてあそぶふざけた政策じゃ」

「返礼品など関係なく困っている人たちに寄付すればいくらか税金を安くしましょう。新型コロナウイルスの感染でお客様が落ちの旅館に行つて通常の料金より高く支払えば確定申告で多少税金を安くしましょうと言うのなら分かるけれど…… 一国の総理大臣が考えることにしてはうなずけないなあ」

「高いと誰も利用せんぞ」

「そんなことはないでしょう。大家さん。孫があめ玉を持って『じいじい。これ買って』と言われたらあめ玉一個、一万円で買うんじゃない？」

「アホか……いや、そうするかも」

「寄付というものは見返りなしにお金を渡すもの。あめ玉一個なんて見返りの価値なし。返礼品のために寄付するなんて、なんか人格を疑うなあ」

「なるほど」

大家が田中に頭を下げる。

「あえて高い宿泊料を払うか、チップをはずむか……僕は貧乏だからできないけれど。いずれにしてもふるさと寄付金もゴーツ・トラベルもおかしな制度。頭のいい政治家ならすぐ方針転換するのが、為政者の務めじゃないのかなあ」

「確かに朝令暮改は政治家の得意技だわ。でも一方では決して非を認めないわ。国民のためではなく自分のための政治だから。『為政者』ではなく『偽政者』なのよね」

山本の言葉は優しく聞こえるが表情が鬼のようになったので田中は遠慮しながら小さな声を出す。

「ナルホド」

山本が両手を耳に当てて聞きづらそうにする。

「もう一度言っただい？」

「ええ」

「なるほど！」

でも総理大臣に比べればちっぽけな権限しか持っていない知事が……特に若手の知事が頑張っているなあ」

「そうね。とにかく分かりやすい情報発信を心がけているわね。方針が間違ったらすぐ訂正するし、無理をお願いしているという姿勢がにじみ出ているわ」

「しゃべり方や頭の下げ方が首相や官房長官や大臣とはまったく違うのじゃ。偉そうな態度がみじんもない。とにかく腰が低い。少なくとも『わしは偉いんだぞ』という感じがまったくない」

「それに比べ一部の老練な知事は問題があるなあ」

「天皇陛下と同じ高級自動車に乗って『何が悪い』とうそぶく知事がおったのう」

「その車で舗装されていない山奥の村に視察に行くらしいわ。でも歳や性別に関係ないように思うけれど」

山本がやんわりと釘を刺す。

「確かに。一方で若くして当選した市長がびっくりするようなことをしたぞ」

「市役所内にサウナを造って市民から突き上げられたわ」

「電気代はキチンと払っているとうそぶいて総スカンを食ったのじゃ」

「知事や市町村長は住民と直結しているから、思い切った対策が打ちやすいけれど、一步間違

うと批判がすごいわ」

「しかし、思い切った対策と言っても権限は知れているし国の指示に従わなければならないのじゃ。結局『自粛をお願いします』としか言えない」

「国は法律を作る前でも混乱に乗じて命令を出します。総理大臣の出した『休校宣言』がそう。本来各地方の教育長の権限です。国民は誰がどういう権限を持っているのか分かりませんから、サクラ問題でやばくなったので国民の目をそらすために宣言を出したのです」

ニュースキャスタに戻った山本の口調がなめらかになる。

「なるほど」

大家は手を打つが田中が山本に質問する。

「ちよつと分からないことがあるんだけど、いいかなあ」

田中が山本に質問する。

「経済再生担当大臣は経済再生の仕事もせずにコロナウイルス感染対策のことばかり言っている。どうして？」

「そう言えばそうね。でもコロナウイルス感染対策という仕事は経済を再生させる仕事に直結しているの」

田中が食い下がる。

「現に感染対策しているんだからコロナウイルス感染対策担当大臣と言う名前がふさわしいと

思うんだけど」

「そう。経済再生は本来経済産業大臣の仕事だし、感染対策は厚生大臣の仕事だわ」

「そうでしょ。〇〇担当大臣とかを作って大臣のイスを増やしているだけのよくな気がする。

それに経済再生担当大臣という名からして経済優先でウイルス対策をなおざりにするんじゃないかと不安を感じる」

「なるほど。田中さんの言うとおりにじゃ。『自粛しながら経済活動をしろ』と矛盾したことはかなり平気で言うのう」

「大家さんもそう思いますか。アクセルとブレーキのペダルが一つになっている」

「首相が『縦割りを廃して行政の無駄をなくす』とか言っておるが、〇〇担当大臣というのが五、六人もいるのはどうということじゃ」

「テレビに煩雑に出ることができから既存の大臣より有名になるわ」

「なるほど」

「ところで感染拡大の対策がうまくいっていないわね。それでも自分たちは一所懸命仕事をしていると言いつているわね」

「悪いのは国民だと言わんばかりの発言が多いのう。要は責任逃れじゃ。『自粛しろ』と言ったのにしなかったから『ほら、蔓延したじゃないか』と自分の責任を曖昧にしようのじゃ」

「そういえば昔こんな歌があったわ。『だ〜か〜ら〜言ったじやないの〜♪』」

田中が山本の歌に聴き惚れるが大家が水を差す

「要はなぜそうなったのかと言う根拠や説明をまったくせんじゃ」

「危機感と緊張感とスピード感だけはいつでも持っているけれど責任感はないなあ」

ここで山本がニュースキヤスターらしく応じる。

「例えば新型コロナウイルスが蔓延し始めた頃、首相が休校宣言したの、なぜだか知っていますか？」

「もちろん。北海道の知事の真似をした愚策じゃ」

「そうです。子供は重症化することはないのに、子供の移動を禁止して感染リスクの高い大人、特に高齢者の移動を制限しなかった。なぜ休校するのかという理由やそう決断した証拠やデータをまったく開示しなかったわ。もちろんその頃新型コロナウイルスの特性が分からないから仕方がない面はあるけれど親には負担がかかる。すると親は会社を休まざるを得なくなる。会社の経済活動に影響が……こういう言うことを見越してあえて休校にしたのかについて、まったく説明がなかったわ」

「そのとおりじゃ。今もって検証はない。マスコミも突っ込まない」

「でも大丈夫だわ」

大家が山本を不思議そうに見つめる。

「マスコミはすぐには検証しません。検証するのに一年近くかかります」

「へー、慎重だと言えば聞こえがいいけれど」

田中が口を挟む。

「マスコミはこういうフレーズが好きなんです。『あれから一年……』」

「たとえばこうかなあ。『新型コロナウイルスの感染が拡大して総理が休校を指示して今日で一年。その指示は適切だったのか、効果があったのか。これを機に検証します』ってな感じ」

「うまい、うまい」

大家が拍手する。

「でものんびりしているなあ。ウイルスはせっせと働いているのに人間は鈍臭いなあ」

「マスコミだけじゃないわ。国会もそうでしょ。毎日開けとは言わないけれど、スキヤンダルもあるから与党は法律が成立したら、さっさと国会を閉会するわ」

「そう！」

田中が意気込むと山本が続ける。

「『ウイルスとの戦いに勝利してオリンピックを！』と総理は言っている。要は戦争状態なんでしょ。戦争中なのに閉会なんてよくできますね」

「なるほど。刻々と変わる戦況に備える体制ができていない！」

大家も同調する。

第五章 無賃乗車

「たとえば状況の変化に応じた対応策を準備せずに始めたゴーツー・トラベルの停止やキャンセルの対応など議論して即座に発表すべきじゃないのう」

「ナルホドと言いたいけれど、まあ、そういうことですね」

第五章 無賃乗車